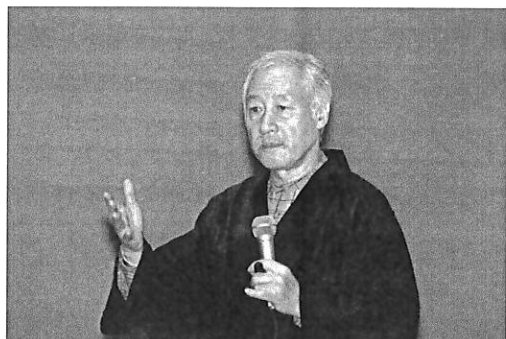


基調講演 里山を活かす「なりわい」を考えよう

法政大学キャリアデザイン学部講師 小松 光一



基調講演の要旨

私たちの先輩たちは非常に哲学的であったと思う。たとえば「はたらく」ということも、労働してお金を得るとは思っていなかった。はたをらくにする、つまり端を楽にしてあげる他者のためのサービスやものつくりのことをはたらくといったのだ。

そうして、いまあらためて、こうした昔からの知恵ともいべき哲学の復権が始まっているように思えてならない。

なりわいもそうである。近代以後、私たちは「なりわい」を「収入」といつてきた。お金になるのが近代だった。

こうしてなりわいという考えかたが否定されたのだった。なりわいは、生業ともいわれた。なるは成る、生るである。ものなり、ものを生み出す、ものづくり。これら総体をみいりといおうという考えは、自給から加工、販売へとつづく第6次産業化という概念を農業にもたらしている。たとえば、東京の練馬では、「風の学校」という市民農園がある。これは立派な学校（社会教育）である。市民が野菜づくりを学び、農家はその授業料をいただくという教育産業としてそれは終始している。

この多様な収入（実入り、身入り）を、農村再生の展望のなかに考えていこうというものだ。いわば、それは収入からなりわいへの転換である。

この転換は地域における働きかたの転換を生み出す。はたらくというのは実にはたをらくにするためのしごと、つまりボランティアワークとしてのはたらきかたのアイデアを生み出していく。

里山を活かすためのはたらきは、当然、多様ななりわいを生み出し、多様な収入（みいり）につないでいく。こうした、多様性が生み出す生命原理の豊かさが、里山の豊かさを生み出していくにちがいない。

プロフィール：北海道出身 64 歳。千葉大学卒業後、千葉県職員となり千葉県農村中堅青年養成所、千葉県農業大学校に勤務。平成 2 年千葉県を退職。その後、茨城大学、御茶ノ水女子大学、和光大学非常勤講師等を経て、現在法政大学キャリアデザイン学部講師として活躍。

・東金市田んぼの学校 元校長。

・「東金農業いきいきプラン」

(意欲ある農家 16 名が農業を元気にしようと取り組んだ計画)のアドバイザー。

主な著書 :

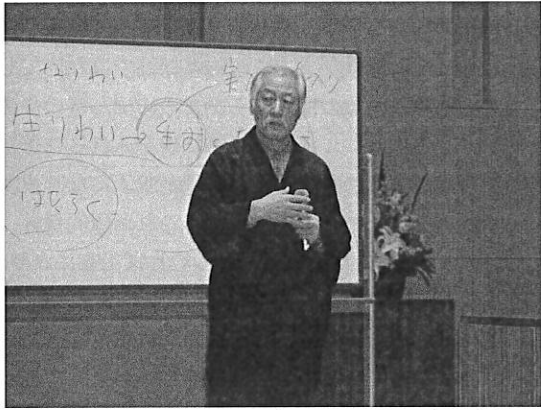
「おもしろ農民への招待状」「進化にむかう日本農業」「北タイ焼畑の村」

「自給と産直で地域をつくる一個性化する日本とアジアの農業」等

里山を活かす「なりわい」を考えよう

法政大学キャリアデザイン学部講師 小松 光一

皆さんこんにちは。今日は里山となりわいについてお話をしますが、最初に「なりわい」って何なのかについて考えてみたいと思います。



「なりわい」というのはよく分からない字ですね。一般的になりわいというと、仕事や収入と書いてあります。しかしこれは元々は、「生りわい」という言葉のようです。ここからやがて「生業」という言葉になります。ということは、なりわいというのはどうやら、ものが生る、それを使って業にしていく仕事ということになります。ということは、「なりわざ」からきたのかもしれないですね。

あなたのなりわいは何ですか、と聞かれるとなんて答えて言いかかわからないですね。農業や林業といえば、それは生業になる。生業というのは、ものが生ったものを使って場合によっては収入にしていくということです。柿の実なんかは生らないですね。自分で食べたり人にあげたりボランティアですね。つまり、生業というのはよくわからないあいまいな収入の元ですね。この生業というのは江戸時代まではありました。しかし近代以降はこれがなくなりました。例えば、農業経営学にはなりわいというのは出てこないですよ。出てくるのは、民俗学や文学です。農業経営学に出てくるのは、収入・支出・利潤という言葉だけです。なりわいという言葉は、歴史的にずっと使われてきた言葉ですが、近代以降は使われていません。

つまりこれは、過去の言葉になったのです。したがってこの今回のテーマ「里山となりわい」という言葉は一般的にはおかしいのです。例えば今から30年前には、なりわいという言葉は通用しなかったでしょう。もっと近代的に、実業、産業にしようとなったはずです。

つまり、「里山と産業」と言えば分かりやすいですね。私たちは、かつて使ってきた古い生業という言葉、30年前には否定された、その言葉を今になってまた使っている、それは何故かという近代をもう一回考え直そうという動きだと思います。バブルがはじけてもう

一度考えて見たいというときに、なりわいという言葉が出てきた。リバイバルですね。現代に戻ってきたのです。

なりわいというと、当然収入、実入りがあります。ここから実入りという言葉ができます。柿が実るそれをいただく、売ってお金にする、食べて腹いっぱいになる、というようになりわいと実入りはセットだったのです。こういう風に我々はなりわいを考えてきた。なりわいというのは曖昧なものですから、本当にお金になるかわからない、なってもいい、ならなくてもいいというものです。例えば我々は「はたらく」という言葉を使いますが、どういう意味でしょうか。これは我々の先輩たちは、はたを楽にしたい、いわゆるボランティア活動ですね。そしてうれしいな気持ちよくなったな、楽になったな、お金をあげましようという風になります。

つまり、働くということは、お金のためにやるのではないのです。働いて喜んでもらってそれでいいのです。場合によってはお金になるということなのです。ボランティアワークだったのです。それをお金にするということは特殊だったのです。我々の先輩たちは働いて、自分たちの地域社会が良くなればいい、結果的にめぐりまわって自分たちの収入になる場合もある、という風に考えてきたのではないかと思います。働くというのはずっとボランティアワークととらえられていたと考えていきます。

もうひとつは、「百姓」という言葉です。百姓という言葉は農民であると理解されてきました。これはおかしいと考えた人がいます。網野善彦さんです。彼は歴史学者ですから、ずっと調べてきました。昔の文献を調べていると、百姓イコール農民ではない、船頭の百姓。金貸しの百姓がいるのです。

つまり、様々なものを組み合わせて生きている人を百姓と呼んでいたのです。実際に千葉県でも本当に、林業だけ農業だけで生活している人は少ないですよ。多くは色々なものを組み合わせてやってきたはず。千葉県の人は、昔、東北辺りでお米ができてそれが江戸に入ってくる、そうすると江戸では値段が高く売れる。それをみた千葉県のお百姓さんは自分で作ったものを担いで東京に出てきて売るということをしていました。これは流通業ですね。そうしたらこれは農民ではなく百姓ですね。

現代の農民は生産者といわれています。第一次の生産だけでなく第二次の加工、第三次の販売も自分でやる、ということは全部足すと百姓というのは第六次産

業になる。東金でもたくさんのお百姓さんがいます。がんばっている人たちは自分でお米を売っています。

例えば、最近東金市と、東金市の農家がつくった資料があります。「農業マップ」というものです。これにはお米をつくっている農家が写真つきで紹介されています。キャッチフレーズと連絡先が書かれています。生業で稼ぎ、働くということはボランティアワークで、百姓というのは色んなことをやることというように、働き方、収入の得方が多様になっているのです。これはまさに民衆の世界・人々の世界です。我々の先輩というのはずっと近代の間こういう世界を生きてきたわけです。

日本の農民は、働くということを2つ考えてきました。「稼ぐ」「仕事」です。例えば、山仕事というのは仕事をしたからすぐにお金になるというものではない、ボランティアワークに近いものです。山の神社の草払いもお金になりません。これは全部暇仕事です。これは百姓の世界です。同時にお金になる仕事、これを「稼ぎ」といいます。出稼ぎなどです。日本のお百姓さんたちは仕事と稼ぎを組み合わせ、バランスよく暮らしてきたのです。これがまさに里山の仕事ではないでしょうか。

里山の暮らしというのには生業と働くことと百姓を組み合わせ成り立っているのです。この世界が里山における労働の世界です。なりわいの世界です。なりわいというのは、生業であり、働くことであり、百姓のことである。これはまさに豊かな世界です。



私は、法政大学講師、大地を守る会顧問をしています。私は非常勤講師ですから、パートのおじさんです。ひとコマいくらずです。また、大地を守る会に行き原稿を書いてお金をもらってというように色んなことを組み合わせやっています。合わせ業一本です。そういった意味では百姓に近いです。そうやって人々は生きてきたのです。

日本の農民は諸稼ぎ、田んぼは基本的に自給です。腹いっぱい食べることはできないでしょう。1反3俵以上はとれないですね、家族6人が食べて終わりです。ですので現金は、田んぼが終ったあとの農間稼ぎをします。田植えから稲刈りの間に時間が空くのでその間に別の稼げる仕事をするのです。または、田んぼの間に鯉を放す、これは隙間稼ぎといえます。こうい

う隙間稼ぎを農間稼ぎといえます。里山は人が関わってつくった世界です。手付かずの森に人が手を入れますと、それが里山になります。

山武杉は里山に近いですね。そして里が有り、その里人が山に入り手を入れていく、そうすると柿や木の実がなる、芝を刈る場所が出てくる、商品作物を植える場所が出てくる。それが里山です。田んぼがあり稲の間には鯉が泳いでいてそれを食べたり売ったりする。田んぼにいるタニシやどじょうを売って身入りにしていく。その風景がまさに生物多様性ではないでしょうか。佐原の小魚の佃煮なんかまさに田んぼの生産物です。そのように、人間が自然に手を入れることによって余業が生まれます。これは現金収入になります。例えば竹で籠をつくって売れば、これが隙間稼ぎ、余業になります。これをちゃんとつくれば工芸になります。また、夏田冬造という言葉があります。夏に田を耕し、冬にはお酒を造ります。そのお酒もまた工芸です。

こうやって日本の工芸は発達しました。これがさらに洗練されますと芸術になります。焼き物や紙すき、藍染めなども農家が余業としてやっていたものなんです。その中から、焼き物が好きで仕方ないという人が出てきてそれを工芸や芸術に高めていったのです。元々は農民がつくったものなのです、里山で生まれたものなのです。

私が今着ている作務衣はタイでつくられています。これをつくっている元のまゆはゴールデンです。これはクメール繭といえます。アンコールワット周辺で作られている繭を農家買って、草木染にし、その後泥染めにしてこの色を出すのです。こういったものを農家のおばちゃんたちが生業としてつくっているのです。

このようになりわいというのは文化的に豊かなものをつくってきてくれるのです。かつてアジアでもこのようなものは廃れたのです。自分たちで糸をつむぐよりも東レ、東洋レーヨンという日本が化学的につくった生地を買えばいいやという風になったのです。村には東レばかりが出回ったのです。日本はその頃繊維産業が盛んでした。アジアの人たちは、出稼ぎで稼いできたお金をつかって東レを買う、そうすると際限なくお金がかかるようになってしまう。そのうち母親も出稼ぎにでるようになって村には老人と子どもしかいなくなってしまう。そうなってくると娘を売ることになるのです。この悪循環を断ち切るために、彼らはもう一度なりわいを取り戻そうということになりました。

タイでは、お金で布を買うような生活は止めよう、その代わりに家の周りにキッチン畑をつくろうということになりました。タイでは昔、森というのはスーパーマーケットであり病院であったといえます。お店も病院もない頃、贅沢をしたい時は森へ行って鳥を捕ったりしたのです。そして家の周りに屋敷林をつくって桑

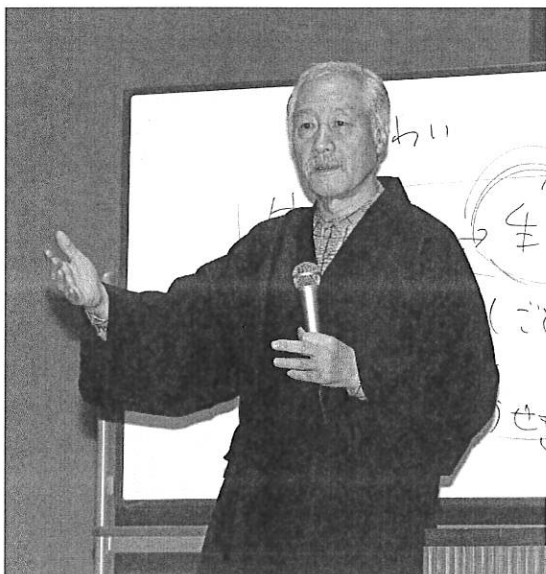
を植えてその下に草木染のための木を植えるのです。これから現金収入が得られるものをつくるのです。

日本の昔話に夕鶴というのがありますね、あれは畑仕事を終えた後に奥さんが夜毎機を織ってできたものをだんなさんが売るとい話です。これこそ日本の百姓のあるべき姿です。お米は自給なので売れません、ですのでこういう織物などの工芸をつくって売るので。こういうものをアジアの女性たちももう一度やり始めたのです。つまり出稼ぎでお金を稼ぐのをやめて、村で里山に手を入れながら暮らすことになったのです。

これはまさに、なりわいの回復です。また、インドではガンジーが糸車をまわそうと言いました。これはインドはイギリスの植民地にされて有名だったインド綿は完全にイギリスの下請けにされてしまいました。そこでガンジーが言ったのは、もう一度糸車を回そう、インドの誇りを取り戻そうと言ったのです。インドの出発点はまさにそれです。糸車を回すためにはコットンの木を植えなければなりません。コットンの木というのは本来3mくらいの高さになるのですが、これを家の周りに植えるのです。そして桑の木があり草木染の木があり、まさにこれは里山なのです。

ようするに、アジアではこのようにもう一度里山でなりわいをしていこうという動きがでているのです。賃金稼ぎではなく、なりわいとしてゆったりと生活しながら、場合によってはお金になるような生活をしているのです。例えばこのタイのおばちゃんたちは、消費者がもっときれいな色で染めてくれといえ化学染料を使って染めるのです。何が何でも草木染というのではないのです。そういう風にゆったりとやっているのです。

先日、私はフィリピンの映画を観ました。「アボン小さい家」という題のものです。日系3世の話なのです。これは戦争の前に出稼ぎに行った人たちの子孫なんです。彼らは色んな訳があって山の中で山岳民族として暮らしているのです。そして彼らがみんな出稼ぎ



に出るのです。それをせずにもう一度機を織って暮らしを立て直していこう、という話なのです。これはタイの場合と全く同じですね。つまり、里山のなりわいを復活させることによって、お金になってもなくてもいいというスタンスで生活していく世界が、私は里山だと思います。

これに対して、治山治水の江戸時代の学者である熊沢蕃山という人が言っています。彼は元々岡山県にいて陽明学を勉強しています。やがて下総の古河に行きます。そこで勉強して彼が出した結論はこうでした。何故江戸の町民は苦しいのか、それは参勤交代があるからだ。江戸の町というのは3分の1が武家屋敷なのです。この武家屋敷を全部森にしてはどうかということでした。参勤交代を止めて森にしてしまい、そこに町民が住む。生垣は竹にしてキッチンガーデンには桑の木を植えようということです。竹と養蚕です。竹というのはまだまだ無尽蔵の可能性をもっています。そのことに注目すべきだと思います。私の教え子は八千代で竹で農業を行っています。彼は竹で竹炭をつくり田んぼに撒いています。それだけで無農薬でできるのです。彼は全く畑にも田んぼにも化学肥料も農薬も堆肥も入れていません。農薬や化学肥料を入れると土は酸化するのです。使うのは竹炭だけです。これを大量に入れます。まさに土の力だけで作物をつくっています。竹でそういうことができるのです。

また、別の私の友人はカンボジアで現地の織物を復活させました。彼はこの前、日本の皇后陛下に会いました。そこで提案したのは、もう一回日本で手摘み手織りでつくる文化を復活させたいということです。工業用にシルクをつくるのでは絶対に中国にはかないませんが、日本のおばあちゃんたちが繭を買って手で織ったらどうでしょうか。かつて熊沢蕃山が言ったのは、江戸中を里山にしてしまえということなんです。

しかも彼は竹と養蚕だと言いました。これは先見の目があったのです。私たちはこれを改めて考えていく必要があると思います。まさに里山というのは新しい現代的なテーマだと、チャレンジしていく価値のあることだと思います。

先ほど堂本知事がおっしゃったように、千葉県というのは全部が里山です。縄文文化が花開いた豊かな場所です。もう一度改めて環境革命が始まっています。工業、産業ブームは終わったのです。新しい時代が始まっているのです。里山をベースにした暮らし方を考えていく時代がきたのではないのでしょうか。まだまだ始まったばかりです。始まりに向けてチャレンジして行ってほしいと思います。

これはまさに働く、生業、百姓、をやっていけば、我々はまだまだやるものがたくさんあるではないですか。中年も若者、不登校、ニートの人たちだってもっとやっいていいのです。このように思います。

今日この後パネルディスカッションがあります。ここに登場する室住君というのは新農家です。生まれは千葉県船橋市ですが、彼は元ニートみたいなもんです。彼は農業という自分の仕事を発見したのです。里山はまさにこういった人にとっての舞台でもあるのです。たくさん里山はあるじゃないですか。がんばっていきましょう。終わります。

司会 どうもありがとうございました。森はスーパーマーケットでありお医者さんであるというお話がとても印象に残りました。やはりまずは里山保全に関わる私たちが里山の価値を再認識する必要があるのではないかと感じます。それではもう一度小松さんに拍手をお願い致します。